



## 食を通して文化が見える

いつの頃からか、テレビを点ければ、食に関わる話題には事欠きません。世に浮き沈みはあるものの、とまれ豊かな時代になりました。古代の中国やローマを見ても、そうですが、文明が発展すると、人々の最後に残る関心は、食と健康に行き着くもののようです。

作家の谷崎潤一郎が終戦前夜疎開先の岡山県勝山のとある旅館で永井荷風に牛肉を振舞ったという話は、荷風の日記『断腸亭日乗』に綴られ、それが世に喧伝されるほど、当時は何も無いといってもいいほどの食事情でした。もっとも、この話は、戦争などどこ吹く風の食道楽とばかりすますわけにもいかない、軍部の横暴への「復讐として日本の国家に対して冷淡無関心なる態度を取る」とする荷風や谷崎のある種執念さえ窺わせるところもあるのですが。

私が生まれたのも、そのほんの数年後のことですから、何も無いことは、それ以上のこと、戦争から復員した父が麦やいも、きゅうりやトマトを作ってくれ、父にくっついて面白がって麦ふみをしたことを覚えています。

そういえば、私の大船の原風景は、5才前後のことでしょうか、何事も玄人はだしを迫及する父が野菜の新種でも手に入れようと考えたのかも知れませんが、大船農業試験所（現在のフラワーセンターの前身）に連れて来られた記憶の中でした。暑い夏の日のことでした。父が奥の部屋に入って行ってしまっていて、ガラんとしたロビーで待ちくたびれて、探検隊がかぶるような父の白いピスヘルメットの頭の飾りをクルクルまわして壊してしまった情景を覚えています。後は、目の前に波が打ち寄せる鎌倉の海の光景だけを。

洋食風料理といえば、ライスカレーが関の山でした。当時は、カレーライスではなく、ライスカレーといったものです。昭和31、2年のこと、ダラム・シンさんというインドの大学の学長がわが家に訪ねて来た折に、母がそのライスカレーを出したことがありました。当時のわが家にとっては精一杯のもてなしだったのだと思いますが、日本に来てカレーを出されて、インド人もビックリでしょうが、今から思うと、かなり滑稽に近い話です。

田舎ということもありましたが、ビーフやポークがそう簡単に手に入らない時代で、鯨肉を使ったカレー仕立ての煮込み料理を食べたこともあります。あまり美味しいものではありませんでした。しかし、人間とは厄介な代物で、クジラを捕ってはいけなくなると、最近では殊更珍味と珍重する人がいるらしい、これもどういふものなのでしょう。

余談ですが、動物愛護を大義名分に己が生活のため多額の寄付金をかき集め、これ見よがしに下劣なパフォーマンスを繰り返す胡散臭い海賊もどきの団体には辟易しますが、でも調査捕鯨って、あんなにたくさんクジラを捕獲しないと、その生態も自然の生態系への影響もわからないものなのではないでしょうか、どなたか、教えて下さい。

そんな時代の育ちから、私は、父に初めて食べさせてもらったバニラのきいたアイスクリームの味や祖母にレストランで初めて食べさせてもらったハンバーグステーキが忘れられません。今の子どもたちにとっては、全ては生まれた時からあるものばかりで、初めて食べる食べ物の感激など記憶に残るはずもないでしょうが。しかも、今や和食だ、中華だ、フレンチだ、いやイタリアン、挙句の果てはエスニックだと、日本には世界中の料理が集まってくる。でも、あっと気がつけば、食糧自給率は、30%を切りました。あの工業国と思われている欧米でさえ、「農ヲ以テ国ノ本ト為ス」、みな基本は、農業国ですのに。

最近、内閣府が「国民幸福度調査」を始めていますが、何が幸福か、幸福感って、面白いものだと思いますか。

昔、南ドイツの古い大学町に住んでいたことがあります。ライン河を隔てた向こう岸はアルザス地方で、白ワインやフォアグラの産地としても有名な場所でした。田園や森の外れにも小綺麗なレストランがあり、多くのドイツ人も訪れるわけです。

通説ほど、私は、ドイツ料理を不味いとは思いません。つい数百年前までは文化果つる国のイギリス料理とは比べものにならないほどハイレベルで、むしろ世界の料理の中でも美味しい部類に入るとは思いますが、フランス料理と比べると繊細さに欠けるところは確かにある。ですから、ドイツ人も食べれば、美味しいというわけです。しかし、彼らは、決してそれを輸入しようとはしない、相変わらず塩で漬けたすっぱいキャベツ（ザウワークラウト）と塩漬け肉をゆでた料理（アイスバイン）を食べるわけです。

それに引き替え、日本人は、美味しいとなれば、彼の地の食材を取り寄せ、世界の果ての料理さえ学び取ろうとする。それは、好奇心旺盛の日本人の美德といえましょう。でも、飽きてしまえば、見向きもしない、これもまたどうしたものか。

ナタデココは、どこにいつてしまったのでしょうか。一瞬は、特需景気に沸きかえったわけですが、設備投資をしたフィリピンの生産農家や加工業者のブームが去った後の有り様は、きっと無惨なことでしょう。

食というものは、人間生活に直接的であるだけに、学問や思想などよりも、却ってその国及び国民の文化に対する構えや心情、あるいは経済や倫理をより鮮明に浮かび上がらせてくれるところがあるものです。

※『荷風全集』（第24巻）岩波書店。

※※古代中国の書『帝範』に、「農爲政本」（農業を政治の根本と為す）という言葉がある。『帝範・臣軌』（明德出版社）。

[>前のページへ戻る](#)